

リベルテール

4 月号



Le Libertaire VoL, III, No 5

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可
印四十七年四月十_五 行第一九号

定価二〇〇円（送料共）

二つの叛乱	2	三浦精一	1
科学について		北条景樹	8
全国的連合は可能か		西塔昌弘	11
違いの判らぬ男		菅輝生	13
野火			15

二つの叛乱

2

三浦精一

無政府主義將軍として、大杉はマフノの運動についてロシア革命が生んだ出来事の中で一番心を動かされ、フランス滞在中の仕事はこの資料を集めることに集中されたと言ひ、相当詳しく書いてゐる。カナダのムーアヘッド大学の教授ウィクター・ピーターズが一九七〇年に出したマフノ伝は、カナダやアメリカにゐるウクライナの亡命者たちからの資料を加えて考証されており、もっとも信頼できるものと思われる。プリンストン大学出版のポール・アグリッチのロシア人アナキストにも書かれてゐる。大杉は「しかるにロシアの無政府主義者たちは革命の ためのその絶大な努力に対してなにを報いられたか。彼等の運命は、ほとんどみなマフノのそれと同じだ。彼等はただボルシェヴィキ政府確立のことも有力な道具となっただけだ。そしてその任務を終えたあとでちやうど野犬狩りでもされるように、ボルシェヴィキ政府の陰險きわまるそしてまた残忍きわまる手段で、あるいは殺され、あるいは追放され、あるいは投獄されてゐる」「無政府主義者は、いつでも、そしてまたどこでも、この権力によって偽瞞され、圧迫されている民衆の味方

だったのだ。彼等は労働者と一緒に、労働者みずから生産を管理する権利を叫んだ。農民と一緒に、自然の権利と都会の労働者との自由な直接の交渉を結ぶ権利とを主張した。そして共産党の新権力がそれを詐偽しとった。いっさいのものを無産階級に返すことを要求した。十月革命における民衆みずからの獲得物を、民衆自身にすなわち労働者と農民との団体の手に返すことを要求した。これがボルシェヴィキ政府に対する無政府主義者の唯一の罪惡であつたのだ」と書いてゐる。石川三四郎氏に、このロシアのアナキストの運命について聞いたことがあつた。「仕方がない。いつでもそれがアナキストの任務でもあり、運命でもあるのだ」と石川さんは答えた。黙々と十字架を負わねばならないのだと私は思った。アナキストの叫びが絶えたとき、路傍の石が叫ぶだろう。マフノはウクライナのギリアイ・ポリリヤという村で一八八九年に生れた。貧しい農民で労働者だった父イワン・ミフネコはマフノが十ヶ月の時に死んで、マフノフスカと呼ばれていた母は四人の子をかかえて生活と戦わねばならなかつた。ネストル・マフノの名は母の名を

とったものである。ネストルの名もロシアではめずらしいもので、トロヤと戦ったギリシヤの勇士の名であり、ロシアでキエフ年代記を書いた修道士の名でもあった。こうした名にこめられた母の祈りがしのばれる。地方の小学校に通いながら、夏には近所の人たちや大地主の所で農牧の労働を手伝い、十二才で学業を終え、十七才で鉄工場に仕事を得たが、また農場でも働いた。ギリアイ・ボーリヤはドニエプル河の支流ガイチュル川の両岸にまたがる集村型の村で、住民の大部分はウクライナ人だったが、その外に多数のロシア人、ポーランド人、ユダヤ人、ドイツ人、それにブルガリア人、トルコ人、ギリシヤ人などがいた。有力なのはユダヤ人、ロシア人、ドイツ人（大部分がキリスト教のメノナイト派）で、それぞれの学校や教会を持っていた。大貴族や有力な資本家も居らず、貧しい人々にも暮しよい所だったが、中産階級が徐々に勢力を伸ばしていた。ここでも特に強かったのは、他のロシア全土に見られるツァーの専政の重圧に対する敵意であった。一九〇五年一月日露戦争の敗戦の報が伝わり、一月九日の「血の日曜日」事件を契機として、ロシア全土に革命の波が広がって行った。クロボトキンがジュネーヴで一九〇三年に出し始めた「パンと自由」は大きな影響力をもってアナキズムはロシア全土に波

及した。ギリアイ・ボーリエにもコサックの一隊が来て戒厳的弾圧をしたことがあった。青年マフノはこうした中で成長した。一九〇七年、前にギリアイ・ボーリエでマフノたちの学校に通い、卒業してカテリノスラフに行っていたチェッコ人のヴォロージャ・アントニがパンフレットなどを持って来て、学友たちと共にアナキスト・グループをつくった。グループの一人は兵役を拒否して逃亡したがアナキズム文書をもって潜入して来て、仲間の人たちと「収奪」をやった。第一回は警察も村の者も町から来たものの所業だろうとしていたが、第二回をやって密告で足がついた。イワン・レヴァドネイの家で集っている所を襲われて一人は死に、逃亡した四名もやがて捕えられた。訊問の結果村のアナキストたちが捕えられ、この中にネストルも入っていた。三人の兄は単なるシンパだった。ネストルは酒癖がわるく、飲むと喧嘩早くなり、おしゃべりになるうえに、身体が小さく、顔色が悪く、にきび面で好感をあたえないために、好まれず、グループに参加していても中心メンバーではなかった。裁判の結果は四名は絞首刑、他はネストルを含めて重労働終身刑でマフノは一九〇九年から一九一七年三月までブチルキの獄につながれていた。以上はピーターによるマフノ伝説の後光を消したものの概要である。

マフノは獄中で後に彼の協力者とも成り、また伝記を書いたピーター・アルシノフとめぐり合った。希望のない獄中でマフノは「自身の教育のために役立たせるために苦しみを受けた」、ロシア語文法、数学、社会史、文学、一口で言えば「後に彼の革命活動に非常に役立った歴史や政治の知識」を得たとアルシノフは書いている。マフノは決して模範囚人でなく、騒ぎを起しては寒い、陰湿な独房に入れられ、そのために肺結核になった。アルシノフはマフノの獄中の生徒で、マフノとともに「国家と資本がつくり出す奴隷性」の破壊を誓うに至った。出獄するとアルシノフはモスクワに止まり、マフノは郷里ギリアイ・ボーリエに帰った。「アナキストの観点から社会的・政治的問題を解決するための根本的認識について知らない」ことを意識しており、こうしたことは十人に九人のアナキストもそうだと、わずかに自分をなぐさめるマフノだった。「私は私が生れ、私が生活し、多くの愛する人々を残して別れたギリアイ・ボーリエにやっとのことで帰って来た。確実に私は農民たちの大家族の中で役立つ活動をしたいのだ」と書いているマフノは本当にウクライナの農民の子で、その郷土愛の上に彼の原始的アナキズムを接木したのだった。英雄のように迎えられたマフノは村のレベルで行なわれている

革命がアナキストの理想と逆行しているものと知った。幾つかの政党の代表で結成されている自治委員会はベトログラードの臨時民主政府を承認していた。マフノは説いた。農民は憲法議会や政党などに関心を持つべきではない。もっと大切なものと直接な為すべきことがあるのだ。すべての人々に土地、工場、仕事場の回復だ。それをするのは今だと。そしてその日にギリアイ・ボーリエ農民連合をつくった。一九一七年三月二十九日である。八月にはその独自の行動を開始した。その独自性は村の人々にステンカ・ラージンかブガチョフの再来ではないかと思わせるものだった。翌年の三月、ソヴィエト政府がブレスト・リトウスク条約を結んだ。ドイツとオーストリアの大軍が侵入して来た。ウクライナは売られた。マフノも村人のバルチザンも涙を呑んだ。六月、マフノはモスクワに来た。アナキストたちの意見を求め、日頃尊敬するクロボトキンをもミトロフの村に訪れた。アヴリッチによれば、ウクライナでの紛糾した実状を語って指示を求めたという。故郷に帰った場合、どうしたら良いのか。クロボトキンにしても具体的に答えることはできなかっただろう。「同志よ、この問題は君の生命にかかわる大問題だ。そして君自身だけが正確な解決をあたえることができるのだ」とクロボトキンは言った。立

ち上って帰ろうとするマフノに「親愛なる同志よ、われわれのたのしみは感情的であってはならない。私心のないこと、自分の選んだゴールに進むための強い良心と意志がすべてを征服するのだ」とつけ加えた。このやさしい公算に接したすべてのリベルテールがそうであったように、クロボトキンの道徳的性格はマフノの上に忘れることのできない印象を残した。その別れの時の言葉は内乱の間を通じて、そしてその後の淋しい不幸な年の間も彼を支えたとマフノは書いている。さらにアヴリッチにより、レーニンとの会見について書いて見よう。マフノに会ったレーニンは、ウクライナの農民階級が新政権に対する態度、南部の軍事情勢、そして革命についてのボリシェヴィキとアナキストとの間の差について詳しく立てた。「アナキストの大多数は現在を理解しないで未来について考えたり書いたりする。この点でわれわれ共産主義はアナキストと分れるのだ」とレーニンは言った。そしてさらに続けて、たとえアナキストが「無私」な人々であっても、その「空虚な狂信性」が現在と未来のヴィジョンを同様に曇らせるのである。「しかし同志よ、君は、現代のひどい悪に対して現実的な態度をもっている。無政府共産主義者の中のほんの三分の一だけでも君のようだったら、われわれ共産主義者は、ある

はつきりした条件のもとに、生産の自由な組織の方向への作業において、ただちに彼等と結合するだろう」と言った。マフノが、アナキストはユートピアンではない。現実的な行動人だ。結局においてウクライナのナショナリストや特権階級を撃退したのはボリシェヴィキでなく、アナキストとエス・エルだったことを思い出せとやり返した。「多分私の間違いだ」とレーニンは答え、マフノが南に帰るのを助けることを申出た。マフノはレーニンの力強い人格に圧迫を感じ、しかし彼が、社会主義知識人と官僚共の紙細工革命（ペーパー・レヴォリュション）という嘲笑的な用語をつかったことには少なからぬ敵意を感じて、会見から帰って来た。マフノがモスクワのアナキスト連盟で会ったアナキスト達——ポロボイ、ロジチン、ゴルディン、サンドミルスキその他の——でさえ、行為の人というよりも本の人であるように思われた。彼等の人道主義や学問がいかにも印象的であるとしても、彼等は自分の言葉や決断に酔っていて、その理想のために戦かう意志を欠いていると思われるのだ。マフノはその農民気質にそぐわないこの大都市から間もなく去って、彼がその力を引き出した土、自由発意と自由への熱情を育ててくれた土、ギリアイ・ポリエに帰って行った。一九一八年七月、ギリアイ・ポー

リエに忍びこんだとき、母の家は焼かれ、兄の一人は銃殺されていた。オーストリア軍とその手先になっているヘトマン・スコロバドスキを襲撃するために、夜通しかかって同志を糾合し、マフノは叫んだ。「過去の例にしたがって、われわれの運命を新しい主人に引渡すためではない。その運命をわれわれ自身の手におさめ、われわれ自身の意志とわれわれ自身の真理の概念にしたがって、われわれの生活を行なうためだ」と。アナキズムの黒旗はふたたびひるがえって、神出鬼没の活躍が始まった。一九二一年の夏まで三年、各地に自由コミューンがつくられ、農民は喜んでマフノに協力し、マフノと共に戦った。ボリシェヴィキがある時は懐柔し、利用して白軍を戦わせたり、欺いて窮地におとし入れたり、あらゆる奸策を弄したことは周知の通りだ。一九二〇年の秋、ウラングーリ將軍の白軍が破竹の勢でモスクワに進軍したとき、政府は投獄または流刑になっているアナキスト全部の釈放というマフノの条件を呑んで、マフノにウラングーリを撃破させ、その留守中にウクライナのアナキストを一網打尽にする一方、勝利を納めて帰るマフノ軍の指揮者たちを招待して捕えた。わずかに手勢をひきいて抵抗するマフノも、もうどうにもならぬ所まで追いつめられて一九二一年八月二十八日ルーマニアを越境して

亡命し、一九三五年七月バリーで淋しく死んで行った。

マフノのこの運動について、大杉が驚いたのはロシアのアナキスト団体が、それに反対し、批判したことであつた。ウクライナのアナキスト・グループの機関誌「ナバート」の呼びかけでヴォーリンやその他の多くのアナキストやサンジカリストが来たが、マフノの気まぐれや軍事独裁に幻滅して去り、残ったのはヴォーリンとアルシノフだけだったと伝えられている。しかしマフノが酒や女に溺れるようになったとき、すでに内部的に敗北していたのだとも考えたようだ。マフノに性格的欠点があることについては前にも言った。誰しも欠点のない者、過誤におちいらぬ者はあり得ない。大杉もそんなことは初めから分っていることだと言っている。コミューンを組織し、農民に喜ばれていて何故それが最後まで続かなかつたのか。何故工場労働者たちが彼を助けようとしなかつたかも考える必要がある。マフノは農民だった。農民は彼の中に農民の正義を見出した。共感した。彼の軍への応募者が多く、武器が足りず説得して帰ってもらったこともあった。マフノのアナキズムは農民の正義だった。彼等は喜んで耕作して喜んで供給した。少し位のマフノの欠点を責める者は居ない。しかし戦かうということは大きな消費である。勝って戦利品を皆に分配す

るといった目的を持たない戦は人と物資の莫大な消費だ。それも農民が戦っている間はまだ良い。戦争は熟練も必要で、年月と共に職業化する。その維持費は税金にならざるを得ない。こうなると逆行である。それに戦争ほど独裁を必要とするものはない。そしてそこに階層も出来、人格的欠点が大きく現われてくる。酒色におぼれたものもはなれる。はじめは農民自身の革命運動であったものが、マフノの運動といったことになる。分り切ったことだが農民だけ、労働者だけの革命は有り得ない。農民と労働者は生活の基盤が異っている。それだけにその特殊性を考えねば社会革命ということは空想になる。マルクス主義者は労働者革命の先行を説き、頑冥な農民はプロレタリア革命に指導されるものとしている。これが間違っていることは言うまでもないが、労働者あるいは農民だけの革命があり得ないということだけは考えている。マフノの運動が労働者たちの共感を呼ばなかったことには、マフノ自身が農民であり、工場労働者ではなかったということだろう。マフノは出獄後モスクワに留まる気になれずに故郷に帰ったし、クロボトキンやレーニンに会った後も郷里に帰った。都市に基礎をもつ工業労働者の運動には、その特殊性がある。鉱業労働者でも交通労働者でも農民とは基盤が別である。マフノ時代の農村もマルクスが考えた階級構成も十九世紀のもので今の農村にも、今の階級構成にも当てはまらないものである。唯一つ正しいことは、農民は農民自身で、労働者は労働者自身で解放を実現しなければならないということだけである。八太氏の階級闘争誤謬論もアナルコ・サンジカリズムの歴史的考察の不足を示すもので、それはむしろ今でもアナーキストと称するものの中に強いマルクス・レーニン主義的偏向、アナルコ・ボルシェヴィズム的傾向への批判と考えねばならない。アナルコ・サンジカリズムももちろん多くの試行錯誤を含んでいる。しかしこれは人間として、どうにもできない過程である。われわれのアナーキストとしての考え方も至って不完全なものである。不完全だからこそ純化、向上、前進への欲求をもっているのだ。われわれのなすべきことは、労働者が労働者自身を解放しようとしたサンジカリズムを歴史的に、そして現実的に考え直すことである。このことはマフノの運動についても、クロボトキンの分業についても言えることで、シェクスピアも言っているように「間違っこそ人間」である。「クロボトキンがこう言った」と何でも固守する者があつたら、クロボトキンはあの温顔を曇らせて「アナーキズムとはそんなものでしょうか。私

理学者として科学的に正しく把握しようとしていたのでした」と言わないだろうか。アナーキズムにはマルクス・レーニン主義教程とか毛沢東語録といった教条は存在しない。八太氏は、矢張りおれ歴史の中に生きていたのだよと言うだろうし、マフノは、それでもクロボトキンはなつかしいよと言うだろう。

大杉の言葉をもって結ぼう。大杉は僕たちのような、単なるブック・アナーキストではなかったようだ。彼は自由に考えている。繰返して読んでもらいたい。

『僕はその団体の多くがマフノ・ピチナの教育部や宣伝部で活動したこのナバト団の意見をもっとも尊重したいと思った。が、それについてですらも、一九二〇年九月のその大会における議論のほんの大体を書いたものしか僕はフランスで手に入れることができなかった。』

マフノ・ピチナについての大会の討論は、いろんな議論に分れて、だいが猛烈なものであったらしい。ある同志は、マフノ・ピチナはロシアの農民運動に第三革命の曙光をもたらすものだと言張して、その意味の決議の通過を要求し、大会はまさに分裂しそうな勢いまで進んだ。そして要するに、マフノの人格には多少同情することのできない点があることと、マフノ・ピチナにも多くの欠点があることに落付いたらしい。

しかしそれだけのことなら僕も最初から予想していた。きまり切ったことなのだ。

ナバトの大会は、無政府主義的傾向の革命から、無政府主義社会に到るまでには、多少の年月のかかることを肯定している。そしてこの過失と誤謬と不断の完成との時代を、過渡時代という権力的意味の言葉で言い現わすことを避けて、非権力的経験の蓄積時代とか、あるいは社会革命を深めて行く時代と呼ぶことに決議している。

大衆のこの不断の完成を助けることが無政府主義者の任務なのだ。そして、ナバト団の多くの同志はそれをその実際の任務としていたのだ。また、ロシアの各地に散在する無政府主義諸団体からも、政府の迫害から逐われてきた幾多の同志が、そこに彼等の本当の任務を見出したのだ。そしてマフノ自身もそのために、「われわれの中に来い。諸君の思想を宣伝し、諸君の理論を適用するために、われわれの中に来い」とその同志を招いたのだ。』